

テキスト祖型のない校訂：  
佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、  
そして「開かれた文獻學」 デジタルヒューマニティーズ  
プロジェクト

ジョナサン・シルク  
(譯) 野武美彌子

## テキスト祖型のない校訂：佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト

ジョナサン・シルク

(譯) 野武美彌子

### 紹介

ジョナサン・シルク (Jonathan A. Silk) 教授は、*Ratnarāsi-sūtra* (『寶梁經』) およびその関連文獻の研究により 1994 年にミシガン大學から博士號を受けておられるが、それに先だって日本で故長尾雅人教授をはじめとする著名な佛教學研究者のもとで學ばれていて、日本との縁も非常に深い研究者である。學位取得後は、グリーンネル・カレッジ、西ミシガン大學、イェール大學、カリフォルニア大學ロスアンゼルス校 (UCLA) で教鞭を執り、2007 年以降はオランダのライデン大學で佛教學の教授を務められている。大乘經典の研究を中心に幅広い分野で研究を展開し、現在世界の佛教學研究をリードしている研究者の一人である。私自身とも學生時代より舊知の仲であるため、2019 年 5 月に來日された際に早稲田大學での講演をお願いした。本稿は、シルク教授御自身が加筆された講演原稿を、講演會当日にも通譯を務められた早稲田大學非常勤講師・野武美彌子氏が和譯されたものである。同教授が現在推進されている「オープン文獻學人文情報プロジェクト」を日本の研究者の方々に紹介する貴重な機会になると思われるので、今回本誌に掲載させて頂くこととした。シルク教授、野武氏、ならびに関係各位の御協力に衷心より感謝申し上げたい。

インド佛教思想の研究においては、まず研究對象となるテキストの校訂作業が要求されるが、その際そのテキストの本來のすがたである「祖型」の存在が(暗黙の)前提とされ、その「祖型」になるべく近いかたちを復原することを目標とするのが一般的であろう。しかしながら、大乘經典のように、そのような「祖型」がそもそも存在したとは考えられない文獻の場合、このような態度は適切なものとは言えない。シルク教授によるならば、大乘經典は、多くの定型句、表現、物語といった共有された「ブロック」をさまざまなかたちで組み合わせることによって構成された、本來流動的なものなので

ある。そして、我々が手にしているさまざまなバージョンは、流動的な經典の諸形態が、いわば歴史上の偶然によって残されたものに過ぎない。そして、このような經典にアプローチする場合、そもそも存在しなかった「祖型」を回復しようとするのではなく、流動的なテキストを流動的なありかたのままですすことこそが求められるのである。

もとより紙媒體の校訂本でそのような流動性を伝えることは至難の業であるが、シルク教授が率いる「開かれた文獻學」プロジェクトでは、あるテキストの諸バージョンの對應箇所をデジタルデータ上でリンクさせることによって、諸バージョンの間の関係をよりダイナミックなかたちで示そうとしている。ただ、限られた範囲のテキストを対象とする場合は、手作業で對應箇所をリンクさせることも可能であるが、膨大な佛教文獻の全體に對してそのような作業を人力で行うことは現實的ではない。そのため「開かれた文獻學」プロジェクトでは、アルゴリズムを用いた自動處理を試みているのだという。

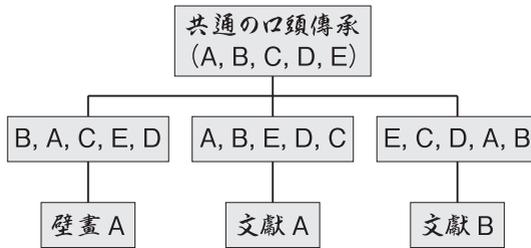
私自身は、文獻資料のデジタル處理に關しては完全な門外漢ではあるが、このような方法は佛教文獻學における非常に有望な方法であるように思われる。またテキストの流動性に關しては、コレット・コックス（Collett D. Cox）教授が國際佛教學會第十八回大會（2017年）で行なわれた「註釋の錯綜：ワシントン大學所藏卷子の場合（Commentarial Entanglements: The Case of the University of Washington Scroll）」と題する發表において、インドの經典註釋書ないし初期アビダルマ文獻の形成に關し類似の見解を述べておられたことが、私には想起された<sup>1</sup>。この發表で、同教授は口頭と文字による傳承のプールのなかから取られた構成單位（module）がさまざまに組み合わせられることによって關係諸文獻が形成されていく流動的な狀況があった可能性を提起されているが、もしそうだとしたら、大乘經典以外の文獻についてもシルク教授が指摘されているのと同様の狀況があったのかも知れない。

さらに私自身も、かつて中央アジア成立と思われる禪觀經典を考察した際に、相通ずる私見を述べたことがある。關係する梵漢の複数の禪觀經典には、類似した觀想上のイメージが共通して現れるのであるが、それらのイメージが現れる順序や文脈は決して一様ではないのである。それはあたかも、同じ材料を使ってさまざまな異なった料理を作ることができることに譬えられよう。

またトヨク石窟における觀想の修行を描いた壁畫に見られる諸々のイメー

1 この發表に關しては、山部（2018, 104）も參照されたい。

ジは、個々のイメージのレベルでは禪觀經典と顕著な類似性を示すが、それらのイメージの配列・構成を何か特定の禪觀經典によって説明することはできない。恐らくは、壁畫が何らかの文獻に基づいて描かれたというよりは、壁畫と文獻の雙方が、觀想實踐者達の口頭傳承という大きな流れの異なった側面を傳えていると考えないと説明できないのではないだろうか。禪觀の口頭傳承は、いくつもの波をもつ大きな川の流れのようなものであり、そのうちの幾つかの波がたまたま個々別々に記録されたものが、我々の有する複数の禪觀經典および禪觀壁畫だったのだと考えられる (Yamabe 1999, 44)。その関係を模式的に圖示するとしたら、以下のようになるであろう (山部 2010, 305, 圖 22)。



この圖と、シルク教授が示す大乘經典の諸版の状況を示す模式圖 (圖 4) とを比較されたい。もとよりインドと中央アジアという異なった地域の異なったジャンルの資料に關する觀察であるので、完全に一致する譯ではないが、我々が別の地域の別のコンテキストで類似した状況を觀察していたということは、興味深いことなのではないだろうか。

私自身も、さらにシルク教授の成果から學びながら、學的交流を深めていきたいと願っている。讀者の方々も、それぞれの視點から同教授の提言を熟讀し、何らかの示唆を得て頂ければ幸いである。

(參照文獻)

Yamabe, Nobuyoshi. 1999. An Examination of the Mural Paintings of Toyok Cave 20 in Conjunction with the Origin of the *Amitayus Visualization Sutra*. *Orientalism* 30(4): 38-44.

山部能宜 2010. 「禪觀と石窟」『新アジア佛教史 5 中央アジア 文明・文化の交差點』佼成出版社。

—— 2018. 「第十八回國際佛教學會大會報告」『東方學』136:101-111.

(以上、山部能宜)

## 講演和譯

### 講演の目的

ホメロスに歸せられる作品や民話、ラビ文獻、そして佛教聖典は、オリジナルな中核たるテキスト祖型 (Ur-text) を缺くという共通した特徴を持ちます。そのような文獻の性質はどのように理解するべきなのでしょう。また、本来多様で流動的なそうした文獻を、畫一的な見方を付與することなく校訂するにはどうしたらいいのでしょうか。歐州研究會議 (European Research Council, ERC) に助成された「開かれた文獻學プロジェクト」 (Open Philology project) は、佛教聖典の校訂を行うデジタル環境を構築しつつあります。この講演では、流動的なテキストの問題を紹介し、ラビ文獻や聖書に關する研究がいかにその問題解決に寄與するか概略し、さらに、複數言語からなる佛教資料の集成に對する我々のチームの取り組みかたを概説します。

ここ 1 世紀半ほどの間、インド佛教の文獻資料は科學的研究の對象でした。我々の分野の始祖すなわち創始者たちは、多くの場合、最近に至るまでほとんどの學者がそうであったように、ギリシア語とラテン語の古典研究の訓練を受けていました。もっとも、必ずしも特にテキスト校訂の分野に限られるわけではありません。結果として、そうした學者たちはテキストの性質に關する暗黙の見解を持っていました。私は今日の講演において、インド佛教文獻研究史を探ろうとしているわけではありません。また、我々の先驅者たちの個人的バックグラウンドが學問の傳統に與えた影響を探索しようとしているわけでもありません。それより、インド佛教文獻研究の今日の狀態を異なる視點から見てみたいと思います。いわば、過去を見るというよりは未來について考えたいのです。論を進める中、次のような事柄を概説する豫定です。いくつかの理論的事柄、また、佛教聖典を研究する者が直面するいくつかの問題、そして、ERC が助成しライデンに本據を置く「開かれた文獻學」と呼ばれるプロジェクトの中で我々が開發しようとしている解決法についてです。

## テキスト研究のゴール

まずは大きな質問から始めましょう。テキスト研究におけるゴールとは何でしょうか。最も広い意味での答えは、「そのテキストを理解しようとする」ということ以外にありえないでしょう。それは、そのテキストの著者が言おうとしたことを理解するということです。あるいは、ある聴衆が著者の意圖をいかに理解したか、ということの理解を目的とすることもできます。テキスト研究のゴールをそのように考えることはまったく理にかなったことです。そして時には、そのほうが一層興味深い目的であると言うことさえできるでしょう。

もしテキスト研究のゴールがこれら二つの選擇肢とは異なるものであるならば、テキスト校訂の必要はありません。もし自分自身の読み方のみに満足するのであれば、すなわち、他の人々がかつて同じ結論に達したかどうかということを検討することなしに、讀んだものに對する自分自身の理解によって觸發を受けることに満足をするのであれば、著者の意圖や書かれた内容さえ我々にとっては関係のないこととなります。もし、我々自身が意味の源泉であるのならば、内省のみが必要な手段となります。言い換えれば、過去の人々が述べたことや意圖したことに關心を持つ場合に限り、我々は文獻學を必要とします。

もし、他の人々が述べたことや意圖したことに關心を持つのであれば、直接的であろうと、あるいは、歴史的にそのテキストを受容してきた社會が想像してきたあり方を通してであろうと、歴史家としては、なんらかの仕方で著者の意圖を把握するよう努力するより他ありません。筆者の意圖の把握はテキストの言葉を通して行われますが、そのためには、まず何よりも次のことを決定する必要があります。すなわち、テキストの言葉とは何か、あるいは、何がテキストの言葉であると信じられていたのか。これら二つは同じことを意味することになります。

## テキストとは何か

このようなゴールを述べることは簡単ですが、簡単なのはそこまでです。こう

テキスト祖型のない校訂・佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）したことを考え始めた今や、次のことを問わねばなりません。テキストとは正確には何を指すのか。こうした問いに答えようとする者たちによって、多量のインクが費され、数知れない木々が犠牲になってきました。彼らはしばしば、抽象的で理論的な形でそうした問いに答えたり、あるいは答えようとしてきました。確かに私の第一の關心もまた理論的なものですが、幾分実践的なものであります。私は、著者の意圖や解釋學的循環に關し哲學的に考察するのではなく、文獻學の方向に向かいたいと思います。それゆえ、私がはじめに知りたいことは、今問題にしているこのテキストというものをいかに位置付けるかということです。

これは一見、難しい問題には見えません。私は寫本を1本、場合によっては複数所持しています。そして、インド大乘佛教の經典の場合には、おそらく翻譯もあります。まずは漢譯とチベット語譯であり、それぞれ、寫本あるいは印刷版で確認されます。私はこれらの資料を収集しまとめることができますが、それらの資料をまとめれば、いわゆるテキストを手に入れたことになるのでしょうか。

個々の寫本とテキストの關係とは何でしょうか。ここでは儒者のようになって、正名（名稱を正すこと）に關わる必要があります。この點に關しては、ラビ文獻（rabbinics）に關する學問がヒントとなるでしょう。

ハイム・ミリコフスキー（Chaim Milikowsky）<sup>1</sup>は、「作品（Work）」という語を「著者もしくは編者の所産」という意味で用い、そして「それは、理論的には、寫本や本といった具體的な表現形式で存在したことは決してない」と述べています。これが最も大きな粹です。

次に「文書（Document）」が來ます。ミリコフスキーは「文書」を「作品の具體的な表現形式」と説明します。彼はさらに續けて次のように述べます。

「作品」たるテキストとは最初期の産物を諸々の單語により實際的に提示したものである。「文書」たるテキストは、寫本に見られるところの、諸々の單語からなる提示である。一般に、「文書」たるテキストは「作品」テキストの復元を試みるために用いられる。もちろん、特定の「文書」テキ

---

<sup>1</sup> Milikowsky 1999: 138, n. 4 ≈ 2006: 82.

ストの提示を目的とすることも認められる。

したがって、ミリコフスキーにとって最も大きな単位は「作品」です。しかし「作品」は、最も広い意味では、単に假想上の普遍的クラスにすぎません。実際に存在するものは「文書」です。あるいはむしろ——ここから事態はより面白くなるのですが——複数の文書です。そしてそれらにおける諸々の單語、つまりテキストと呼ばれるものが「作品」を體現します。あるいは單純に、「作品」を提示すると言ったほうがいいのかもかもしれません。テキスト、すなわち文書の中の諸々の單語からどのように「作品」に移ることができるのか。これはすべての校訂者にとっての基本的な問いです。

簡単なアプローチがあります。自分の興味は、一つの版（今はとりあえず、より明確にすることなくこの曖昧な表現を使っておきますが）により表されるところの、ある一つの歴史的瞬間にある、と決めるのです。一つの版、ここではそれを一つの寫本とすると、その寫本をそれぞれのものとして讀むわけです。これは、歴史上のある特定の瞬間、ある作品の一つの受容の形に興味を持った者がとるべきスタンスなのかもしれません。たとえば、ある特定の人物に所有され使用された一つの寫本に興味を持った場合です。

しかし、假にこのアプローチをとる場合、どのような意味で私は「作品」を研究しているのでしょうか。さらに、いかにして一つの寫本を讀むことが、理解するという意味で讀むことができるでしょうか。「作品」を提示するものとして讀むのだとしても、あるいは單に、それ自身として整合性のあるものとして讀むのだとしてもです。こうした疑問を投げかけるのは次のような理由のためです。すなわち、もし、單獨のソースのみを扱うという方針を取るのだとしたら、その單獨のソースに見るからに明らかな誤りがあったとしても、私にはそれを正すことができないからです。そしてこれは重要な點です。ソースを轉寫しても、それが必ずしも「作品」を提示するものとしてソースを讀むことになるわけではない、そして時には、讀んだことにすらまったくならないこともありえます。我々が何かを讀む際には、必然的になんらかの校訂作業が伴います。もし、「その犬が男を噛んだ」という文を讀んだら、二つの犬のうちの

テキスト祖型のない校訂:佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト(シルク)一つを削除するでしょう。そうする根拠は何でしょうか。「犬犬」と呼ばれる犬は存在しないということは知られています。それゆえ、はじめの「犬」は2番目の「犬」を修飾できません。しかし「犬」の一つを削除するや否や、文をありのままに読んでいることにはならなくなります。

ここで、版(edition)とは何か、どうあるべきなのかという問いについてより直接的に考えてみましょう。「原典書寫版」(diplomatic edition)と呼ばれる、原典の嚴密な轉寫があります。ミリコフスキーはこの原典書寫版について次のように述べています<sup>2</sup>。

原典書寫版は……校訂者が「作品」のテキストではなく「文書」のテキストの提示を意圖する場合にのみ用いられる。

彼は次のようにさえ述べます<sup>3</sup>。

各々の寫本は唯一の編纂の瞬間を表している、という方法論的前提にもし立つならば、別の寫本の讀みに従ってある寫本の讀みを訂正するということとはできない。

原典書寫版を作成するとは轉寫をする(transcribe)ということです。「唯一の編纂の瞬間」という句にはすぐ後にまた戻りますが、ここでは、修正を含めたテキストの編集と、それを讀み理解することの間の親密な關係性を強調しておきましょう。讀み・理解することはテキスト編集無くしては成立しません。それゆえ、ミリコフスキーが、別の寫本に従ってある寫本を修正することはできない、と主張する際、彼は、それぞれのソースを君主として扱う讀者は、今讀んでいる寫本以外のソースに頼ってその寫本を讀んだり理解したりすることはできない、と述べているのです。

原典書寫版に代わる別のものとして、「選擇的テキスト」(eclectic text)があります。ミリコフスキーは次のように述べています<sup>4</sup>。

ある編者が、一つの文書の嚴密な轉寫(transcription)を讀者に伝えること

---

2 Milikowsky 2006: 86.

3 Milikowsky 2002: 553.

4 Milikowsky 2006: 86.

を意圖せず、作品テキストを、基本としている文書テキストから少なくとも一箇所逸脱のあるテキストとして提示する場合、そのようなテキストは選擇的テキストと呼ばれるべきである。

しかし、問題があります。複数のソースと単一の作品の間にはいかなる關係があるのでしょうか。ミリコフスキーはラビ文獻 (Rabbinic literature) の専門家です。ラビ文獻は、後に示すように、おおよそ類型論的に大乘經典と共通するところがあります。この二つのジャンルの比較は、佛教文獻を研究する者にとって大きな示唆となりうるでしょう。

### ヘブライ語聖書とインド大乘經典

ですが、まずはラビ文獻を一時離れ聖書について考えてみましょう。というのは聖書においては、少なくともこの點に關しては事態がもう少しシンプルであるからです。そして、そのシンプルである理由が重要です。

聖書、ここではヘブライ語の聖書ですが、それはよく確立された「作品」です。というのは、テクストゥス・レセプトゥス (「受け入れられたテキスト」) たるこのヘブライ語テキストは、互いに非常によく合致する數々の寫本の形で残っているのみならず、70人譯聖書やアラム語譯、シリア語譯が大變近い形を示しているからです。

しかしこうした事情になったのは、マソラ本文に代わりえたほとんどすべてのものがそれ以前に抑壓され、早い時代にテキストの傳統が統一されたからにすぎないのです<sup>5</sup>。このことは強調すべき點であり、また、佛教研究者が理解しなければならない重要な點です。聖書文獻の傳承の歴史的事情は、ヘブライ語聖書に關し實質的にテキスト祖型 (Ur-text) について語ることを可能としました。こうしたことは、佛典においてはありえないことであると私は考えます。ヘブライ語聖書においてそうしたことが可能となったのは、少なくともほ

---

5 ジェイムズ・ダヴィラ (Davila 1994: 219) はこれに關し次のように簡潔に述べている。「マソラ本文がこのように一様になったのは、他のすべての形のテキストが抑壓されたからにすぎない。」

テキスト祖型のない校訂・佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）とんどのヘブライ語聖書が、特定しうる「唯一の編纂の瞬間」を経たからです。言い換えれば、ヘブライ語聖書の文獻傳承が編集と意識的な改訂を経たのみならず、加えて、マソラ本文に代わりえたものが、まったく政治的理由と呼べる理由からその後抑壓され、實質的にマソラ本文が残されたのです。

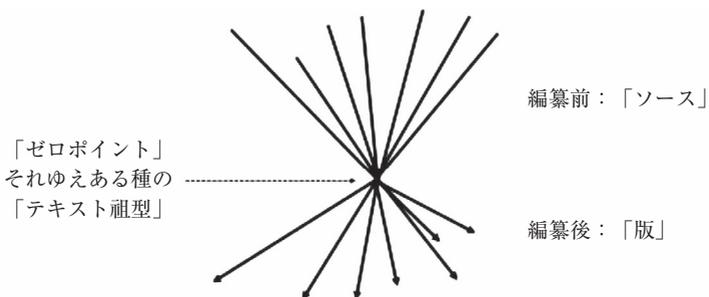
ここで強調すべきことは、佛教テキストと同様、聖書のテキストも發展を経たということです。しかしその發展經過、すなわち編纂より以前の歴史は、単一の版が他の版を消し去るほど優勢になったという政治的偶然のためにほとんどわかりません。このようなことはユダヤ文獻の中においても他には見られないことです。

ピーター・シェーファー（Peter Schäfer）は、ラビ文獻に関するミリコフスキーとの議論の中で、我々にとって有益なシナリオを示しています。「あらゆる著作は」とシェーファーは言います。これは「ラビ文獻のあらゆる著作は」ということを意味しています。

あらゆる著作は二つの歴史を持つ。編纂前と編纂後の歴史である。これら二つの歴史の間に、確固としてゼロポイントがある。……編纂の結果としての作品のアイデンティティはこのゼロポイントにおいて生じる。それ以前のものはずべて、いまだ「作品」ではなく、「編纂者により用いられたソース」である。それ以降のものはずべて、かの唯一の編纂というゼロポイントにより規定されるところのその作品の「傳承の歴史」に屬する<sup>6</sup>。

聖書にとってはこれはまったく適切な記述です。ゼロポイントは、理論的に復元可能なテキスト祖型を表します。

圖 1



しかしながらインド大乘經典の場合は、おそらく單なる歴史的偶然により、このようなことにはなりません。少なくとも我々にはそのようには見えません。あるいはさらに別の言い方をすれば、いかなる編集作業が行われてきたにせよ、いかなる編集のための選別が試みられてきたにせよ、それらは明らかな痕跡を残しませんでした。意圖的な編集という意味でのインド大乘聖典の正典化の試みはあったのかもしれませんが。しかし、このようなことがインドでかつてあったのだとしても、そうした取り組みはいまだ我々に知られていませんし、また、ヘブライ語聖書に見られるような統一的な形とはなりませんでした。

一方、インド大乘聖典の歴史的発展に關して示唆を與えるかもしれない事象も、我々には知られることはないとは私は考えます。というのは、こうした歴史を發見することを妨げるような解釋の枠組みを以て、我々は通常、インド大乘經典に接してきたからです。

## 推測的修正

よく經驗されることですが、まったく意味の通らない一節に出會ったらどうするべきでしょうか。ありうる答へとしては、ナンセンスを許容するか、あるいは、テキストを修正するかでしょう。聖書本文批評の第一人者エマニュエル・トフ (Emanuel Tov) は、次のことを我々に思い起こさせます<sup>7</sup>。

解釋によってテキストの修正の必要が生じる。しかし、修正そのものもテキストの觀點から受け入れられるものでなければならない。

これはすなわち、テキストの意味が通らない場合に修正をするが、その修正は、理解しようとしているそのテキストの形と歴史に基づかなければならないということです。もし、手元にある根據資料 (evidence) が示す讀みが意味をなさず、他にはソースがない場合、あるいは、そのテキストの歴史的性質に關する評價のために他のソースを考慮することを拒む場合、我々は途方にくれる

---

6 Schäfer 1989: 90.

7 Tov 1997: 5.

テキスト祖型のない校訂・佛敎經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）こととなります。我々は推測しなければなりません。洒落た用語では、これは「推測的修正（conjectural emendation）」あるいは「本來的意味での修正（emendation proper）」と呼ばれます。だが実際にはこれは、經驗的知識に基づいた推測に他なりません。推測的修正から何を指すのか、ということは面白い問いですが、ここではこの興味深いトピックはひとまず置いておきましょう。

## 大乘經典の性質

大乘經典に戻り、その性質を理解するのに何ができるのか考えましょう。ここでは、インドの資料のみを取り扱うこととします。もっとも、たとえば中國で作られた聖典についても似たようなことが言えるかと思ひます。ですが状況は異なりますので今はインドの資料のみを扱うこととします。

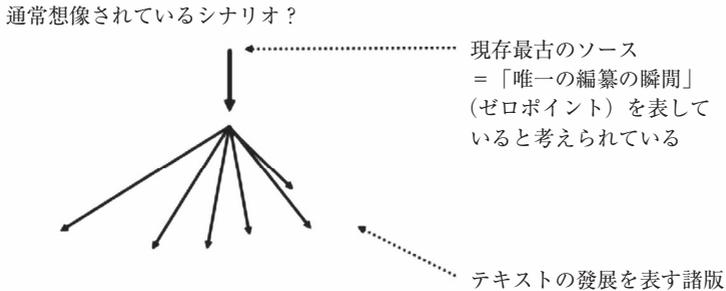
當たり前のことですが、すでに知られているソースのみに基づいてインド大乘經典文獻の性質を推測することは可能です。これらのソースに關し以下の二つの問いについて考えてみたいと思ひます。どのようなソースがあるのか、ということ、そして、それらはいかに作られたのか、ということです。これら二つの問いは互いに關連しているということを見ましよう。

我々のソースとなりうるものとしては、まずサンスクリット寫本がありますが、それは年代や發見場所が多岐に渡ることがあります。そしてしばしば、複数の漢譯やチベット語譯、また時にはコータン語譯など他の資料もあります。さて、こうした中、一本の寫本はものとしては唯一の存在であるという點で、寫本は翻譯とは異なります。少なくとも、現在我々が目にする漢譯とチベット語譯は意識的な編集作業の結果であり、複数の版で傳承されています。そのうちのいくつかは、もちろん寫本のかたちです。したがって、漢譯とチベット語譯のそれぞれは、そのテキスト自體の歴史の問題を伴って我々の前に現れます。特に、チベット大藏經佛說部に納められた諸作品の系統は、往々にして解きほぐすことが容易ではありません。また、一部のチベット語譯は、いわゆる系統的混交の結果を示しており、テキストの系統を辿るのを非常に難しくしています。こうしたことはとても重要なことですが、話の焦點をずらさないため

にこの問題はとりあえずおいておき、核心的問題に戻るようにしましょう。

サンスクリット・チベット語・中國語の様々なテキストは、多くの場合そのテキストの異なった層を示しています。通常のシナリオに見られるように、典型的にはテキストは時を経て發展します。すなわち、各層は歴史的發展の各瞬間を表しています。こうしたことも歴史的に正しいのですが、私は、大乘經典にとってその明白な流動性と多様性は、その最初期から、テキストが産出される際の性質であったと考えます。主にその證據の少なさのために、テキストの流動性と多様性は成立後の發展の特徴のように見えているのです。我々は通常、深く考えることなく「唯一の編纂の瞬間」を想像しているかもしれませんが、そしてそれは、早期の漢譯であれそれ以外のものであれ、我々が持つソースのうちもっとも未發達のものが作られた瞬間にはかならないのかもしれませんが、そしてそれが他の版の源である、と見なされます。しかし私は、こうした形の想像は誤りであると考えます。

圖 2



もっとも、このような想像も、今では失われてしまっているかもしれないが過去には存在していた「オリジナル」なテキストに我々がたどり着くことはまったくできない、という点では誤りではありません。しかしこのジャンルの本来の性質として、そのような核心・中心的な創作はそもそも存在しえないのです。それゆえこうした想像は誤りなのです。ラビ文獻の性質についても一度しばし考えて見ることによって、また別のモデルが見えてくるでしょう。

## マクロフォーム・マイクロフォーム・マルチフォーム

シェーファーは、アーノルド・ゴールドバーグの仕事に言及する中、次のように表現します<sup>8</sup>。

その元の文脈が失われ、單に、新たに作り出された（そして變化しつつある）編集による結合の中でのみ存在するテキストの構成單位 (unit)。

シェーファー自身、ラビ文獻の性質についてのこうした見方から生み出された用語を紹介し、ゴールドバーグが言う「テキストの構成單位」について次のように述べています<sup>9</sup>。

重ねられた著作單位に關し、「著作 (writing)」や「作品 (work)」という用語に代えて、私は「マクロフォーム」という用語を用いる。マクロフォームという語は、架空・想像上の單一のテキストを、また、種々の寫本上に見られるこのテキストのしばしば異なった形の顯現を具體的に指す。それゆえ、マイクロフォームとマクロフォームの境は流動的である。ある特定のテキストの幾つかの構成單位は、重ねられた全體（それゆえつまりマクロフォーム）の部分ともなるし、獨立して傳承された編集單位（それゆえマイクロフォーム）ともなる。

別の箇所ではシェーファーは次のような問いを發しています<sup>10</sup>。

一つのテキストの様々な版 (recension) は、そのテキストの種々の段階の編纂として、互いにかに關連しているのか。個々の傳統、最も小さな著作のまとまりは、それが現れるところの「作品」というマクロフォームとの關係においてかに評價されるべきか。一つの「作品」の諸部分が、おおよそのまとまりを持った別の「作品」の中に存在する意味は何か。編纂、あるいは、最終的な編纂とは何か。「作品」には時間に沿って複数回の「編纂」があるが、最終的な編纂はただ一つであるのか。編纂を最終的な編纂と區別するものは何か。編纂を權威づけるものは何か。あるいは、最終的

---

8 Schäfer 1986: 144.

9 Boustan 2007: 139. ブスタンはここで Schäfer 1992: 6, n. 14 を引用している。

10 Schäfer 1986: 150.

な編纂とは、ある意味、その寫本の傳統が突然途切れることであるのか。

そして、ここでシェーファーは、ミリコフスキーが言う「唯一の編纂の瞬間」という見方をラビ文獻に關し退けています。シェーファーにとっては逆に、作品を作り上げる編纂は、すべての個々の要素に決まった場所を配分するゼロポイントで起こるのではなく、プロセスであり、それは、編纂の前後の歴史にいかなるはっきりとした區別ももたらさないものです<sup>11</sup>。ジェイムズ・ダヴィラ (James Davila) はほぼ同様のことを次のように述べています<sup>12</sup>。

素材が傳承されていく間、様々な編纂者が素材に取り組んだ。

彼は今日に傳わる「マルチフォーム」に言及しています。

[それゆえ] テキストが普遍的で最終的なものに編纂されたことは決してない。あるいは、正典の形に編纂されたことは決してないと言った方がいいのかもしれない。

マイクロフォーム、マクロフォーム、マルチフォーム。こうした用語は、「テキスト」が「文書」を構成し、「文書」が「作品」を構成するという世界と必ずしも矛盾するものではありませんが、流動する世界、テキストの創造が進行中の世界、テキストに動きがありテキストが生きている世界、テキストが、ある特定の瞬間に凍りついて本の中に閉じ込められることなく、頼りにならない寫字生とずさんな書寫生のおかげでかろうじて再びそこから抜け出すような世界を語る用語です。ここにあるのは、ある一箇所ですら狭くなっていて、そこを通り抜けると再び無秩序なシャワーとなって廣がる砂時計ではなく、川筋や岸との境がしばしば不明瞭で曲がりくねって流れる川のようなものです。

マーティン・ジャフィー (Martin Jaffee) は次のように説明しています<sup>13</sup>。

ある一つのマイクロフォームが、テキストの様々な版を循環・再循環する物語や傳承の單位を構成し、様々な文書環境の中で他のマイクロフォームと結合關係にある。このような文書環境は「作品」ではなく「マクロフォーム」である。

---

11 Schäfer 1989: 90.

12 Davila 1994: 214.

13 Jaffee 1999: 21.

テキスト祖型のない校訂・佛敎經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）この考えでは、「作品」は他と共有される諸部分からなります。マクロフォームたるあるテキストは諸々の新たな構成要素を獲得し、一つの単一體としての自身のアイデンティティを保ちつつ、それら新たに獲得した諸要素を内部で再編成するでしょう。このような状況においては、ある程度統一された各々のマクロフォームどうしが、さらに素材を共有する可能性があります。それゆえ、二つのマクロフォームどうしの関係もまた流動的である、ということに注意しなければなりません。

### 大乘聖典の發展をいかに理解するべきか

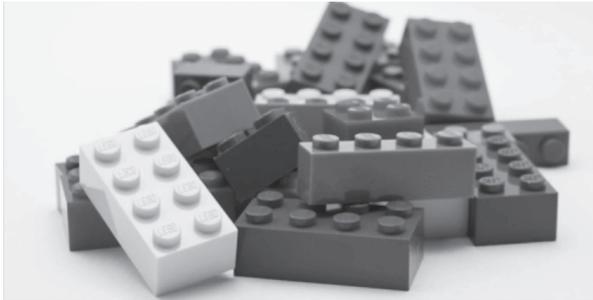
大乘聖典の「編纂」あるいは「作成」活動が起こったインドの社會的状況について語ろうとは思いません。また、テキストが發展し新たな資料を集めることを可能とした経緯について考察しようとも思いません。これらの経緯に關し、社會的歴史的事柄はほとんど何も知られていないのです。しかしながら、大乘聖典の性質に關する最も肝要な問いの一つは、大乘經典の止まることのない作成過程に關する問いです。これに關して、ラビ文獻研究から學ばれるべき中心の見識として次のようなことがあります。すなわち、佛敎文獻において、編纂前のテキスト作成段階と編纂後のテキスト作成段階に明確な斷絶を想像する必要はないということ、いや、むしろ想像するべきではないということです。インド社會自體から得られるソース、すなわち、サンスクリット寫本や翻譯・引用はすべて、繼續しつつあった、そして極めて流動的な過程の跡が偶然に保存された結果なのです。

したがって、重要なのは大乘聖典の發展をいかに理解するかという問いです。以上述べたような聖典作成に關する觀點に立つと、それは、大乘聖典の原初の成り立ちをどのような性質のものとして理解するのかという問いと同じこととなります。そしてそれは、そのようなテキストの構成を考えることによって明らかになります。特に、大乘聖典どうしがどれだけのものを共有しているのか、あるいは大乘聖典がそれら以外の諸文獻とどれだけのものを共有しているのか、ということを考えることによって明確になります。

大乘聖典は定例句 (stock phrase) ・共通の表現・共有される物語に満ちています。そしてもちろんそのような大乘聖典は、我々の想像を超えた形で、より初期のすなわち一般的に大乘以前と考えられている佛教文獻に見出される句や表現・構成によって徹頭徹尾充滿されています。より小さなテキストの單位である「ペリコーペ (pericope)」について、單に編纂前の單位としてではなく、止まることのない作成の過程がそこから起こった蓄えの部分として考えると、マクロフォームの流動性、あるいは、マクロフォームのマルチフォームとは、編纂後に時と共に發展しつつあった大乘聖典の成長の基本的特徴なのではなく、その始まりからまさしく大乘聖典のアイデンティティーであった、ということに氣づくでしょう。これは、「テキスト」と呼ばれるものどうし、あるいは「作品」どうしの關係をいかに見るかということにとっても非常に重要です。そしてこれはもちろん、これらの素材に對する我々の編集者としての姿勢にも重大な影響をもたらします。

抽象的なことは視覚化するのが有効です。今のシナリオを視覚化する方法として、ブロックを積む狀況を考えることができます。

圖 3



ブロック自体は同じような状態を保ちつつ、さまざまな形で他のブロックと組み合わせることができ、時には、同じようなブロックの一群を何か別の形に組み合わせることもできます。このような文獻を學者はいかに扱うことができるでしょうか。

## ダヴィラが示す文獻に對する3つのアプローチ

ダヴィラは次のように言い換えることができる3つの可能なアプローチを示しています<sup>14</sup>。

1. テキスト祖型を再構成する。
2. 部分的祖型 (hyparchetype) を再構成する。この初期の編集形とそれ以前のものとの關係についての疑問は置いておくとする。
3. 2番目のステップを現在に傳わるすべての版と系統に適用した上で、それらの關係についての研究を試みる。

もちろん、この提案には、幾つかの推測と共にヒエラルキーが内在しています。テキスト祖型は、それが存在した場合に限り再構成することができます。もし我々が、單獨の起源から發達したのではない作品についてそのテキスト祖型を「再構成」するならば、知られているその子孫すべてにとっての先祖である、と主張できるものを作ったはずだが、実際にはその「先祖」は決してそうした役割を果たしたものではなかった、ということになります。しかしこれは、そうした作業が無意味であると言っているわけではありません。

ある意味では、これは言語學上の再構成と似たプロセスでしょう。インド・ヨーロッパ語族のようなある語族の祖型を假定することは可能です。それによって、後世まで残った言語の重要な特徴を進化の形で説明できるようになります。しかし、インド・ヨーロッパ祖語が實際の言語としてかつて存在していた、と學者たちが考えていたのはだいぶ昔のことだと思います。インド・ヨーロッパ祖語を措定する利點は、それによって言語の發展のモデルを作ることができること、また、言語の本質をよりよく評價することができることです。たとえば、祖語の措定によって、さもなくば失われた語を理解することができます。たとえば、ヴェーダに見られる語で、もはやインド語には存在しないが古代教會スラヴ語を通して理解することができるような語があります。同様に、聖典の祖型を作ることは、ある意味有益でしょう。しかしもしそうであると言うな

---

14 Davila 1994: 215.

らば、再構築の結果は決して過去にそのままの形で存在したわけではなかったのだと理解しなければなりません。インド・ヨーロッパ祖語がそうでなかったのと同様に。

この道に従うにしろ、あるいはむしろソースに現れたテキストそのものの形を尊重するにせよ、依然として、ヴィトゲンシュタインが言う意味での「家族」、すなわち我々が「作品」と呼ぶことを受け入れるようなものの一部と見られる現存資料どうしの関係について考察しなければなりません。

しかし編者にとっては、考慮しなければならないソースを認識し、そして原典書寫版以上のものが必要であると認めることは、単にはじめの一步にすぎません。ではその次に来るものは何でしょうか。

ダヴィラの2番目の選択肢を選び、部分的祖型を再構成することもできます。これは、編者としての選択を必要とします。そして、トフが指摘するように、ある読みが他より好ましいと主張することは、「オリジナル」を認めることを含意します。なぜならば、そのような主張は、言語の面からであろうと語彙や考え・意味の点からであろうと、この読みはオリジナルの作品をよりよく反映しているという主張であるからです<sup>15</sup>。

具體的な例を検討してみましょう。私は永年、『迦葉品』(*Kāśyapaparivarta*)として知られているテキストについて研究をしてきました。しかし、そのサンスクリット・2本のチベット語譯・5本の完全な漢譯、および、注釋と無数の引用を注意深く検討すればするほどに、「作品」をどこに見出したらいいのかわからなくなりました。批判校訂版の作成を目指す際、テキストを確立するためのアプローチはいかにあるべきなのでしょう。完本に近いサンスクリット寫本の中の何節かについて、それは、「作品」が編纂されたその時にはその部分を形成してはいなかった、そしてそれゆえ、「作品」が編纂されたその時期は、現存サンスクリット寫本そのものを生み出した編纂経緯とは関係がない、あるいは関係があるとしてもそれは間接的にすぎない、と何らかの理由に基づ

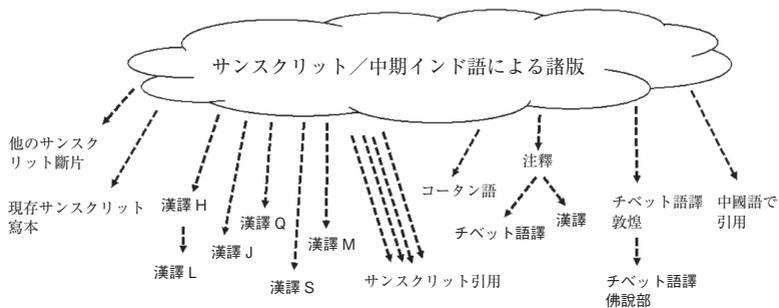
15 Tov 1992: 168. トフは次のようにも述べている。ある読みが別の読みの崩れた形であると判断する場合には、テキスト祖型に言及することなく、一方の読みが他より優れていると主張することが可能である。

テキスト祖型のない校訂・佛敎經典とユダヤ敎ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）  
 いて考え、寫本中のその何節かを省いてしまってもいいのでしょうか。そもそも、「作品」を編纂するなどということができのでしょうか。私は繼時的な一直線の發展を想定したいのでしょうか。そして、もしそうであるならば、その發展のクロノロジーが現存資料のクロノロジーに反映されていると信じるのでしょうか。

一つの資料において確認されているある節や文、あるいは語句を除こうとする場合、その排除の基準とは何なののでしょうか。時にはそのような修正はそれほど問題とはなりません。たとえば、重複があるように見えます。それは、ある場合には語句の重複であり、時には書寫生が二度寫したように見えるより大きな一連の語句の重複です。單なる轉寫以上の存在である版から、そうした重複箇所を除くことに反對することができるのでしょうか。明らかなミススペリングは直しましょうか。サンスクリット寫本と比べた場合に、漢譯やチベット語の根據資料に、節の順に關して手が加えられていることが認められる場合はどうしたらいいのでしょうか。別の極端な例として、手に入った複数のソースそれぞれの原典書寫版に満足するのでしょうか。もしそうであるのなら、どういった理由でマクロフォームが存在したと考へ、また、いかなる形にせよ一つの版を修正するのでしょうか。もしそれぞれの證言資料（witness）が絶對であるのなら、どうして私がわずかでもそこに介入することができるのでしょうか。

我々が持つ諸資料の狀況を視覚化したものを見てみましょう。

圖 4



ゴシックで示したソースは複数の版で傳えられており、それらは互いに系統的に關連している可能性が大きい

入手可能な根據資料に關する一番よい説明は、「作品」が非常に流動的な状態でインドに存在していたというものであると思います。我々が今日にするものは偶然残されたものです。それらには、次のようなものがあります。サンスクリットの根據資料・サンスクリット（または中期インド語）から漢譯されたもの（今は中期インド語については置いておきましょう）・チベットにおいて改訂されたチベット語譯・獨立のコータン語の根據資料・漢譯とチベット語譯でのみ現存する注釋、それからインド資料における引用、これはサンスクリット及びチベット語譯と漢譯で残っています。

### 目指すべきゴールは何か

以上の状況を説明するために、『迦葉品』の複数のソースについて考えてみましょう。それらは明らかに、同じテキストを示していません。すると我々には選擇肢ができます。もし、ある作品に關し、それは単一な編纂の瞬間を経てきたと考えるのであれば、その編纂から現れた形を再構築することを目指さなければなりません。そして、次なる仕事として、最終的な形に供せられ編纂されていった諸資料の検討にとりかかるでしょう。しかし、今問題としているような佛教聖典に關し、最終的編纂というものを語ることは實際にできるのでしょうか。シェーファーが問うたように、最終的編纂とは「大方の場合、單に、寫本の傳統がたまたま途絶えたということ<sup>16)</sup>」にすぎないのではないのでしょうか。すると、ダヴィラが自身の諸資料に關して提案するような次のことは適當なののでしょうか。すなわち<sup>17)</sup>、

理想的な研究法は……すべての寫本における文書の發達のそれぞれのレベルを再構築した大量の校訂版を作ること。最初期の編纂段階から最後期で最も擴大した寫本まで。

これに對しミリコフスキーは強く反發します。あるいはむしろ、そのように見

---

16 Schäfer 1986: 150.

17 Davila 1994: 220.

テキスト祖型のない校訂: 佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト (シルク) えると言うべきでしょう。彼は述べます<sup>18</sup>。

獨立した傳承の諸系統を提示することが校訂版の目的である、という考え方、あるいはその提示は校訂版の目的の一つである、というものであっても、そうした考え方は即座に否定されなければならない。大いにやりがいのあるこのゴールの實現は共觀版 (synoptic edition) によらなければならない。

ミリコフスキーはここで明確に反對をしていますが、これは、歴史的情報を提供する版を確立することの好ましきには関わらないと私には見えます。彼が述べているのはむしろ、もし我々が実際に「作品」を扱うのであれば、どのような形を「作品」に與えたいと望んでいるのかということを決定せざるをえない、ということです。すなわち、我々は、ある特定の形を確立できると考え、校訂版を目指すのでしょうか。あるいは、テキストの流動性を記録することを目指しているのでしょうか。選擇的校訂版 (critical, eclectic edition) を放棄するのはテキスト祖型という考え方の放棄であるように私には思えません。そして逆もまた同様です。しかし、選擇的校訂版の放棄は、テキストの傳統の流動性を記録する努力を放棄することになるわけではありません。

## 開かれた文獻學プロジェクトにおける目的とアプローチ

では、我々にできることは何でしょうか。紙上で、二次元上でできることはありません。それは明らかです。ここで、私が現在ライデン大學で指揮を取っている「開かれた文獻學」という名のプロジェクトにおける目的とアプローチをご紹介します。我々は、『大寶積經』 (*Mahāratnakūṭa*) と呼ばれる 49 のテキストの集成に取り組んでいます。先に言及した『迦葉品』はこのテキスト集成に含まれる一つの經典です。

我々が取り組もうとしているはじめの問題は基本的なものです。すなわち、どの資料が近しいのか、一つの資料のどの部分が他の資料のどの部分と互いに

---

18 Milikowsky 2006: 101.

関係しているのか。聖書の場合であれば、最も基本的な状況を示すだけでも、はるか昔の學者たちがすでにヘブライ語のテキストとギリシア語譯との對應を整理しています。それゆえ、聖書のテキストをデジタル環境に移すことはある意味些細なことです。いいインターフェイスを以てすれば、各語の文法解析等を見るためにヘブライ語テキストとギリシア語譯の對應關係を簡単に手際よく調べることができます。複数のヘブライ語やギリシア語の資料を調べることさえ可能です。しかし、こうしたことが可能なのは、對應と同定の仕事がすでに手作業で行われているからです。さて、先に觸れました『迦葉品』の箇所も對應も手作業で行われました。しかし、この方法を膨大な佛教大藏經全體に適用するのは現実的ではありません。さらに、我々が持つ資料の集成は、標準的な版のデジタル化はされていますが、品詞タグ付けがなされていません。さらに悪いことに、古典中國語あるいはチベット語のテキストにおいては、單語を同定するよい方法さえいまだありません。

さて、聖典を詳細に研究しようとする場合に、何が平行なのかかわからないのは大きな問題です。ギリシア語譯を見ながらヘブライ語の一節を研究するのは難しくありません。両者の對應關係がすでに整理されているからです。しかし我々の分野ではまだそのようになっていません。ですが、状況がまったく悲惨だというわけではありません。カタログなど手作業で行われた仕事のおかげで、あるチベット語のテキストが漢譯テキストと對應しているというように、何が何に對應するのか大體のところ知られているからです。それゆえ、任意に選ばれた日本語の文にどんな英文が相當するのか決定しようとする中でグーグルが直面している問題に我々が悩まされることはありません。平行を探するのに何を見たらいいのかはおおよそわかっています。しかし、文単位で資料を對應させるのはいまだ容易ではありません。それゆえ、『大寶積經』中のそれぞれの經典のチベット語と漢譯資料を對應させるアルゴリズムを開発中です。それが成功した暁には、この作業を残りの大藏經に廣げていきたいと考えています。実際のところ、我々の對應アルゴリズムは完璧である必要はありません。我々が扱う資料の集成は大きいですが有限であり、最終的には手作業でチェックすることが可能であるからです。將來の仕事とはなりますが、我々に

テキスト祖型のない校訂・佛敎經典とユダヤ敎文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）  
として理想的なゴールの一つは漢譯大藏經とチベット語大藏經の完全な對應です。

すると資料どうしの對應關係の整理は、ある意味簡単なことです。では、これは、マイクロフォームに關する今までの議論とどう關係しているのでしょうか。兩者の關係は次のような點においてです。すなわち、チベット語の一つの文、それは我々のシステムにおいては n-gram と呼ばれる音節の並びと定義づけられるのですが、それを漢譯中の相當 n-gram に關連させるアルゴリズムは、大藏經全體に渡って、同一のあるいは類似した n-gram を見つけるのにも用いることができるのです。我々の對應エンジンは、マイクロフォーム發見機となりえます。そしてその強みは、同一性を必要としないことです。そもそもこのエンジンは對象の同一性を求めることができません。なぜならば、それは、同一の言語の中（たとえば漢譯資料どうし）のみならず、2つ以上の言語資料上でも働くからです。

私たちのプロジェクトの全ソースコードはネット上で自由に使えるようにしているので、テキスト用のこのモデルは、他のプロジェクトや他の言語であっても使用できます。プロジェクトに關する資料のすべてはウェブサイト [openphilology.eu](http://openphilology.eu) で公開されます。

この對應エンジンの有用な點はこれに止まりません。單獨の寫本によって提示されるのではない傳承テキストと同様、我々には、「一つの漢譯テキスト」ではなく複数の證言資料があります。それは、ある特定の譯が中國において多様に傳承された證據です。同様のことは、チベット語や、入手可能であればサンスクリットの資料等についても言えます。我々のエンジンを適用すれば、チベット語譯や漢譯の場合では、手元にある證言資料に基づいてテキストの歴史を實際に系統立てて辿ることができるかもしれません。すなわち、翻譯者のペンを離れた時の翻譯の形に近いもの、唯一の編纂の瞬間に辿り着くことができるかもしれません。そしてこれは多くの學者にとって大變興味深いものでしょう。

文獻學的考慮事項に加え、この件に關しては、いわば倫理的問いとでも呼べるものがあります。すなわち、なぜ我々は、實際のコミュニティーに屬してい

た現實世界の寫本より、再構築されるものを特別扱いするのでしょうか。言い換えれば、再構築された形、すなわちテキスト祖型あるいは部分的祖型は、たとえば少なくとも理論的には、特定の時にチベットの翻譯者が手にしたテキストの形を考えるのには役立つかもしれません。また、特に、インドの原本に戻るためにそれを利用する人たちには大きな關心事かもしれません。しかし他の人々にとっては、ある歴史の中、ある場所に存在してきたそのテキストも、再構築されたテキスト以上だとは言わないまでも、重要です。部分的祖型のみを焦點を当てると、テキストの歴史的現實を無視することになります。テキストの多様な傳統のそれぞれ、及び、傳承系統の再構築等を提供する諸々のエディション、この兩者に近づく手段を提供することは可能でしょうか。

テキスト利用者が、それぞれ異なった規準を以て異なった觀點からテキストにアクセスすることができるようなシステムを開発することは可能でしょうか。それは可能です。そしてそれこそが、我々が行なっていることなのです。このシステムでは、大體は一致しているが完全に一致しているわけではない異なった證言資料の轉寫を並べることができます。システムを使う利用者がデータのいずれの面を採用するか選ぶこともできます。私自身は、それでもほとんどの利用者はまずは校訂者の仕事の結果に、そして往々にしてそのみに興味を持つであろうと思います。實際、校訂者の仕事は、通常、ある版における共通した中核を、そしてそれゆえおそらくその版の最も古い回復可能な状態を見出すことを目指すでしょう。しかし、ここで雲の圖を思い出していただきたいのですが、ある作品の複数の版を集め、それらそれぞれの最も古い状態を回復する、そしてそこからそれら複数の版を結びつける祖型を再構築する、ということはほとんど確實に不可能です。互いに關連はあるが、共通した祖先から派生したものではない複数のソース、すなわち複数の版に戻るのならばできます。これらはすべて一つの「作品」の「諸版」ですが、どれも、それらにとっての「作品」ではありません。

このようなオープンシステムには別の長所もあります。テキストを校訂する場合、我々は通常、ヴァリエントと呼ばれるものを注意深く集め、そして同じく注意深く、それらヴァリエントを実用的にはアクセスし難いアパレイタ

テキスト祖型のない校訂:佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト(シルクス (apparatus) に記録します。それらヴァリアントのほとんどは、實際のところ誤りです。まさしくそれゆえに我々はそれらをヴァリアントと考えたわけです。しかし、考えてみてください。たとえば、もしあなたが言語學者で、ある言語の音聲學史に興味を持っていたら、あなたは何にもまして、書寫生が犯した誤り、規範的觀點からすると正しくない音や氣音などが見られる箇所に興味を持つかもしれません。また別のシナリオを考えてみましょう。あなたは聖典そのものを研究しているのではなく、そのテキストを引用したある學者あるいは思想家の作品を研究しています。もしかしたら、彼が引用したテキストの讀みを、あなたは、最も基本的で歴史的に正しい讀みであると判断しないかもしれません。従來の校訂テキストでは、假に可能な場合ですが、利用者が、校訂者によって大變注意深くまた愛情をもって校合された證言資料の持つ實際の豊かな傳承史に觸れるには、非常な困難を伴うでしょう。なぜならば、それはアパレイタスに隠されているからです。それゆえ、ある校訂者の仕事の結果を、他の人々が、特に校訂者自身さえ期待していなかったような方法で實際に利用できるように提示する方法を開発することは、小さな勝利ではないのです。

したがってゴールは、入手可能なデータの中の何を見るのか、そしてどのようにそのデータが現れるのか利用者が決められるようにすることです。ソフトウェア開發の視點で言えば、ソフトウェア環境はモジュールから (modularly) 成り立っており誰でも我々が用意した資料に付け加えることができます。先に述べましたように私はソフトウェア開發者ではありません。それゆえ、技術的詳細に關するこうした側面について論じる立場にはありません。ただ、我々のソフトウェア環境の構成はミニコフスキーの「作品」「テキスト」「證言資料」というモデルに基づいており、それゆえ、我々のソフトウェア環境を將來的に利用する人々がソフトウェア・デザインの専門的知識を要求されるということはないということを強調しておきましょう。

「開かれた文獻學」プロジェクトは、誰でもが文化的遺物に近づき利用できるようにするために私たちができるあらゆることをするべきだという信念とともに始まりました。テキストの流動性が保て、利用者それぞれがコントロール

できるようなデジタル環境を構築することにより、このゴールに向けて大きな貢献をしていきたいと願っています。

### ラビ文獻と聖書本文批評に関するごく簡単な参考文献表

Boustan, Ra'Anan S.

2007 "The Study of Heikhalot Literature: Between Mystical Experience and Textual Artifact." *Currents in Biblical Research* 6/1: 130-160.

Davila, James R.

1994 "Prolegomena to a Critical Edition of the Hekhalot Rabbati." *Journal of Jewish Studies* 45: 208-226.

2005 "(How) Can We Tell if a Greek Apocryphon or Pseudepigraphon has been Translated from Hebrew or Aramaic?" *Journal for the Study of the Pseudepigrapha* 15: 3-61.

Fraade, Steven D.

1999 "Literary Composition and Oral Performance in Early Midrashim." *Oral Tradition* 14/1: 33-51.

Hayman, A. P.

1995 "The 'Original Text': A Scholarly Illusion?" In J. Davis, G. Harvey, and G. Watson, eds., *Words Remembered, Texts Renewed: Essays in Honour of John F.A. Sawyer* (Sheffield: Sheffield Academic Press): 434-449.

Jaffee, Martin S. Jaffee.

1999 "Oral Tradition in the Writings of Rabbinic Oral Torah: On Theorizing Rabbinic Orality." *Oral Tradition* 14/1: 3-32

Milikowsky, Chaim.

1988 "The Status Question of Research in Rabbinic Literature." *Journal of Jewish Studies* 39/2: 201-211.

1996 "On Editing Rabbinic Texts." *Jewish Quarterly Review* 86/3-4: 409-417.

1999 "Further on Editing Rabbinic Texts." *Jewish Quarterly Review* 90/1-2: 137-149.

2002 "On the Formation and Transmission of Bereshit Rabba and the Yerushalmi: Questions of Redaction, Text-Criticism and Literary Relationships." *Jewish Quarterly Review* 92/3-4: 521-567.

2006 "Reflections on the Practice of Textual Criticism in the Study of Midrash Aggada. The legitimacy, the indispensability and the feasibility of recovering and presenting the (most) original text." Carol Bakhos, ed., *Current Trends*

テキスト祖型のない校訂: 佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト (シルク)

*in the Study of Midrash. Supplements to the Journal for the Study of Judaism*  
106. (Leiden and Boston: Brill).

Schäfer, Peter

1986 “Research into Rabbinic Literature: An Attempt to Define the Status Quaestionis.” *Journal of Jewish Studies*, 37:139-152

1989 “Once Again the Status Quaestionis of Research in Rabbinic Literature: An Answer to Chaim Milikowsky.” *Journal of Jewish Studies* 40/1: 89-94.

1992 *The Hidden and Manifest God: Some Major Themes in Early Jewish Mysticism* (Albany: State University of New York Press).

Tov, Emanuel

1992 *Textual Criticism of the Hebrew Bible* (Minneapolis: Fortress Press/Assen and Maastricht: Van Gorcum).

1997 *The Text-Critical Use of the Septuagint in Biblical Research*. 2<sup>nd</sup> ed. Jerusalem Biblical Studies 3 (Jerusalem: Simor).

## 譯者あとがき

本稿は、2019年5月19日に早稲田大學文學學術院において行われた Jonathan A. Silk 教授 (ライデン大學) による講演 “Editing without an Ur-text: Buddhist Sūtras, Rabbinic Text Criticism, and the Open Philology Digital Humanities Project” の改訂版の和譯である。ラビ文獻とは、ヘブライ語聖書成立後のユダヤ教において現われた文獻群を指し、そこには口傳律法やその註釋、聖書の註釋などが含まれる<sup>1</sup>。シルク氏は大乘經典のテキスト研究に關するプロジェクトを設計するにあたり、ラビ文獻研究者たちの寫本やテキスト校訂に關する議論から示唆を得たと本講演の中で述べている。

ラビ文獻の研究は長い歴史を持つが、テキスト校訂に強い關心が向けられてきたわけではないようである<sup>2</sup>。そのためであろうか、寫本やテキストをどのようなものとして把えるべきかという問題や、テキスト校訂の手法といった、テキストを扱うにあたり基本となる事柄に關し共通の理解が定まっておらず、大變刺激的な議論が行われている。たとえば、本文中でたびたび言及されているピーター・シェーファーとハイム・ミリコフスキーはこの分野における重要なテキスト出版に携わってきた人物であるが、寫本やテキスト校訂に關してまったく異なった考え方を示す。ラビ文獻のテキストの成立や傳承の狀況には、インド學や佛教學の

1 ラビ文獻を紹介した日本語の資料としては、土岐 1994 がある。

2 Milikowsky 1988: 206-207, 1999: 137-138.

分野で扱われるテキストのそれとは異なる面もあろう。だが、テキストや寫本に對する考え方として非常に興味深く参考となると思われるので、講演の論の背景にある兩者の議論をここに紹介してみたい。兩者の論争はシェーファーが1986年に発表した論文に始まる。そこで、まずこの論文の趣旨を説明し、その後、このシェーファーの論に答えた形のミニコフスキーの論文數本を取り上げ、彼の反論の内容をまとめて紹介する。譯者はラビ文獻に關してはまったくの素人であり、テキストの内容に關わるような細かな點まで追えたわけではない。また、参照すべき論文は他にもあるかと思う。限られた範圍であるが、テキスト校訂に關する兩者のおおよその見解の違いを伝えられるよう試みたい。

1986年の論文においてシェーファーは、現存最古の釋義的 Midrash (聖書註解)である Bereshit Rabba の複數の寫本に關し、それらが示す讀みの違いが非常に大きいことを指摘する。そしてそれは、個々の寫本が一つの作品の異なった版 (recension) であるということを示しているのか、あるいは、それら寫本はそれぞれある程度獨立したものであり、それらを Bereshit Rabba という一つの作品として把える見方は架空の見方にすぎないということなのか、という疑問を提示する (p. 146)。

また、Bereshit Rabba に引用されている Yerushalmi (エルサレム・タルムード) が現存の Yerushalmi とは異なることから、Bereshit Rabba 成立時、Bereshit Rabba と Yerushalmi の兩テキストがそれぞれ獨立した別のテキストであったのかどうかを疑う (p. 147)。そこでは、Yerushalmi に複數の編纂段階がありその初期のものが Bereshit Rabba に引用されたという考え方は却下されている。その場合、Bereshit Rabba に引用された Yerushalmi はまだ最終的な編纂段階に至っていないのであるからいわゆる Yerushalmi ('the' Yerushalmi) とは呼べないであろう、というのがシェーファーの示す理由である。

さらに、口傳律法の集成である Mishnah と Tosefta に關しても、ある場合には一方が他方を前提としているがまた別の場合にはその逆の現象が見られる、あるいは、Mishnah とはまったく獨立した Tosefta の卷 (tractate) も存在したり、また、現在では知られるところの Mishnah とは別の Mishnah をその權威とする Tosefta の卷があったり、というように、兩者の關係は複雑であることを指摘する。また、近年の研究では Mishnah 全體と Tosefta 全體を比べるのではなく、Mishnah と Tosefta 各々の卷について検討するようになってきているという點にも觸れる。そして、この論文が發表された段階ではまだそうした比較を十分に行なった研究は出ていなかったが、たとえそのような個別の卷の比較が行われたとしても以前

テキスト祖型のない校訂・佛敎經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）と同様の問題が残るであろうと豫想する。すなわち、一つの巻に關し Mishnah と Tosefta の關係を統一的に説明する規則が必ずしも見出されるわけではなく、同じ巻の中に、Mishnah と Tosefta に關し異った形の説明を要するような資料が見つかることとなるであろうと述べる（p. 149）。ここで彼が言わんとしていることは、テキストを作品單位で考えることには限界があり、作品を構成する素材の單位（“raw material”, “relatively small literary units”）で考える必要があるということである。

それを示す典型例として、シェーファーはさらに Hekhalot 文獻に言及する。すなわち、この文獻は作品どうしの境界をはっきり區別することが難しく、構成要素單位で考えざるを得ない文獻であると言う。そして、このような特徴は實はラビ文獻全體に關して言える大きな特徴であると主張する（p. 149）。

以上のような例を踏まえ、Mishnah や Tosefta, Yerushalmi, Midrashim, Balvi（パピロニア・タルムード）等のラビ文獻はそれぞれ確固とした區別を持ち個々の中で閉じられたものとして存在してきたのではないという結論が示される<sup>3</sup>。そして、個々の獨立したテキストが歴史的な前後關係を持って存在していたわけではない以上、テキストに關し歴史的な問いを設定し答えることは非常に難しい、とする。また、最終的編纂の結果としての作品どうしを區別・比較し、それぞれの孤立した傳統 [を想定し、そ] の間に疑似的な因果關係を想定することに意味はないと主張する（p. 150）。

ではシェーファーはどのようにテキストを扱うべきであると考えたのであろうか。彼は二つの方法論を示す（pp. 150-151）。一つは、ラビ文獻のあらゆるテキストを共時的なものとして扱うというものである。これは、シェーファーが論文中（p. 145）で言及しているゴールドバーグの提唱する方法である。この方法によると、テキストを時間的に配置したり歴史的に差別化することはまったく捨て去られなければならない。シェーファーはこの方法を正當で必要なものとして認めるものの「その對價は大きい」とし、次の案をより望ましいものとする。

シェーファーがより望ましいとするもう一つの案とは、寫本研究である。彼は、現代の批判的校訂を含めた最終編纂段階においてほとんどのラビ文獻は人工的な産物となってしまっている、我々は最終編纂段階以前の證言に戻らなければならない、とし、それは寫本であると述べる。彼が勧める寫本研究とは、よりよい讀みを求める批判的校訂作業ではない。彼が提唱するのは「動的な寫本の傳統

3 シェーファーはそれを「多様に織り交ぜられ……開かれたテキストの連続であるところのラビ文獻」（diversely interwoven and ... open text-continuum ‘Rabbinic Literature’）と表現している。

の記録・敘述 (the documentation and description of a dynamic manuscript tradition)』である。こうした作業が重ねられて初めて、ラビ文献の個々の作品について、また、作品どうしの境界についてより正確な発言をすることができる、と彼は述べる。

最後にシェーファーは、ラビ文献の個々の作品は歴史の中に位置付けることができないが、個々の寫本に關しては事情が異なると言う。すなわち、多くの場合、個々の寫本に關してはその歴史的背景を知ることができる。それゆえ寫本研究は、作品のテキスト祖型を見出したり、いわゆる作品そのものを歴史的に位置付けることはない(シェーファーはテキスト祖型はほとんどの場合存在しなかったとする)が、寫本傳承の中に反映されたテキストの歴史を知らせることとなる、と言う (pp. 151-152)。

以上のシェーファーの論の基本は、1988年のミリコフスキーの批判を受けて翌年出版した論文の中に端的にまとめられている。それは、作品の編纂とは、傳承に先立つある一時點(ゼロポイント)において起きたものではなく傳承の一部であり、編纂の前後を區別することができないプロセスである、というものである<sup>4</sup>。彼がこのような考えを持つに至ったのは、上に示した1986年の論から判断すると、現存する資料間の關係が複雑であり簡単に説明することができないという事實があるからである。そこから、そもそもテキストは歴史の中のある一時點で定まったわけではない、作品を構成する素材テキストは絶えず作品間を移動し、そうした意味で作品は絶えず揺れ動いてきたという見方に至ったと見られる。そしてそれは、作品が誕生した時點の否定、及び、作品間の境界の否定という考え方も伴ったものとなっている。このような考え方に立つと、それぞれの作品を個別の歴史を持つものとして扱い、寫本の系統を検討したりテキストの再建を試みることは何の意味もないこととなる。寫本研究は、それぞれの寫本をそのままの形で提示し寫本が擔ってきた傳承を示すことを目指すべきであるとされる。

シェーファーはこのように、可能な限り原型に近い形のテキストの再建を念頭においた批判的テキスト校訂に對し否定的な態度を示している。こうした姿勢はラビ文献研究者の間では稀ではないようで、テキスト出版にあたり、寫本に極力手を加えることなくできるだけそのままの形で寫本情報を提示し異讀は單に情報として示す、讀みの正しさを追求したテキストは作らない(自らの判断を示したい場合には注記として示す)といった形がよく取られるようである<sup>5</sup>。こうしたスタ

4 Schäfer 1989: 90. p. 89 も参照。この箇所は和譯本文「マイクロフォーム・マクロフォーム・マルチフォーム」の項で引用されている。

5 Milikowsky 1999: 138-140; 2006: 86. これらの中には、複数の寫本のテキストを並べて示す共觀版のスタイルを取るものと、メインとする寫本のテキストを變更を加えることなく

テキスト祖型のない校訂・佛敎經典とユダヤ敎ラビ文献研究における本文批評、そして「開かれた文献學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）の出版が選ばれるのは、より原型に近いテキストを求める作業が、逆にかつて存在しなかった新たなテキストを作り出してしまわないのではないかという人々の恐れもあるであろうが<sup>6</sup>、テキスト編纂というものは絶えず行われるものでテキストが固定化されることはないというシェーファーと同様の考え方に基づく場合もある<sup>7</sup>。

ミリコフスキーは、こうした形のテキスト提示をテキスト校訂であるとするラビ文献研究者の風潮を強く批判する<sup>8</sup>。これらのテキストの校訂者はしばしば、寫本間の讀みの異なりが非常に大きいということをこうしたテキストの提示の仕方を選択した理由の一つとするが、ミリコフスキーは、実際に検討してみるとそれらの寫本間の讀みの異なりはそれほど大きなものではないと指摘する<sup>9</sup>。寫本間で讀みの小さな異なりが數多く見られることはミリコフスキーも承知している。しかし彼は、その原因は、ユダヤ敎において書寫生が遠慮なくテキストを「訂正」する習慣があったこと<sup>10</sup>、Midrash テキストの聖書引用箇所において書寫生が聖書の引用量を随意に變化させたこと、書寫生それぞれの正書法に違いがあったこと、あるいはセム語にみられるシntaxの揺れ<sup>11</sup>等であり、元のテキスト自體とは関係がないと言う。ミリコフスキー自身は、可能な限り原型に近い形のテキストを再現して提示することがテキスト校訂者に求められる責務であると考へ、それには、寫本それぞれの系統を明らかにする stemmatic analysis（系統分析）を最良の方法と考へている<sup>12</sup>。彼は、H. N. Duggan の言葉を借りて次のような考へを示している。複數の寫本が示す讀みが、それら寫本が一つのテキストから派

---

そのまま提示し、異讀情報をアバレイタスに示すスタイルがある。ミリコフスキーはこれらをまとめて「轉寫版」(transcriptional edition) と呼んでいる。彼は、こうしたテキストの編者たちが、テキストに手を加えなかった成果を誇っていると傳えている (Milikowsky 1999: 141)。なお、これら轉寫版では最小限の誤りが訂正されることはあるようであり、そうした意味でこのタイプのエディションは「原典書寫版」(diplomatic edition) と呼ばれるべきではないとミリコフスキーは注意している (Milikowsky 1999: 142, n. 15)。

6 Milikowsky 2006: 98 參照。

7 Milikowsky 1999: 145; 2006: 93 參照。

8 ただしミリコフスキーは、Mishnah と Babylonian Talmud や Palestinian Talmud の場合は、作品の研究を受容の歴史の研究から切り離すことが合理的ではないので、テキスト提示の仕方として、個々の寫本の傳承を混ぜない方法を取ることはやむを得ないことであろうと認める (Milikowsky 1999: 142)。しかし初期ラビ文献のそれ以外の分野における轉寫版のみの「テキスト校訂」に對しては批判を強くする。たとえば Milikowsky 1999: 143-149 參照。

9 Milikowsky 1988: 203-204; 1999: 146-149; 2006: 91.

10 Milikowsky 1988: 204.

11 Milikowsky 1988: 203, n. 9.

12 Milikowsky 2006: 92, 94, 101.

生したものではないことを示す場合には、それらからオリジナルのテキストを再建することはできない。しかし、そもそもテキスト傳承が元々単一なものであったのかそうでなかったのかは分析を経なければわからない<sup>13</sup>。彼にとって、異讀の存在はテキストが傳承の歴史を経てきたという證であり、まとまった編纂がなかったという證據とはならない<sup>14</sup>。

ラビ文獻においては、テキスト編纂はその傳承の歴史の中で絶えず行われてきたのであり一時点での編纂により作品が確立されるということはない、というシェーファーの考え方に對しては、ミリコフスキーは、そもそもそのような判断ができるほどラビ文獻のテキスト批評は數多く行われていないと指摘する<sup>15</sup>。だが一方、限られた數ではあるがラビ文獻の分野においてもいくつかのテキストに關しその寫本の系統分析が行われてきた。それらの寫本に關し系統分析が可能であったという事實は、ラビ文獻研究者が取り組んでいるテキストは他と區別可能なテキストであり、規範的な本文批評を施すことができる對象であることを示しているとミリコフスキーは述べる<sup>16</sup>。

シェーファーは、Mishnah と Tosefta の關係が複雑であり、兩者の關係を單純に説明することが難しいことを例の一つとして、作品はある時点での編纂を経て各々一つのまとまりとして他と區別を持って傳承されていったというモデルを否定した。そして、編纂は傳承の中で絶えず行なわれたことであり、特定の編纂というものはなかった、また、作品と作品の間ではテキストのやりとりが絶えずあったのだから作品を他から獨立した傳承を持つものと考えすることはできない、と

13 Milikowsky 2006: 92.

14 Milikowsky 1988: 207.

15 Milikowsky 1988: 202, 204. テキスト編纂は絶えず行われてきた、すなわち眞の編纂というものはなかったと言えるかどうかを検討する方法にミリコフスキーは觸れている。もし寫本傳承に比較的變動がなく、少數の寫本にのみ常に大きな異讀が見つかるのであれば、それはそれらの寫本の書寫生に歸される特徴であろう。一方、ラビ文獻では一般的に作品の改變は自由に行われてきた、と言うためには、すべての寫本傳承における異讀の度合いを検討しなければならない (Milikowsky 1988: 204)。作品の様々な時代の異讀を比べ、それらに大きな違いがないかどうか検討する必要もあるであろう (Milikowsky 1988: 210, n. 33)。

16 Milikowsky 1988: 205, 207. シェーファーはミリコフスキーのこの論文に對する反論として翌年出版した論文 (Schäfer 1989: 89) において、ミリコフスキーはここでラビ文獻一般について語っていると解釋し、彼の主張の根據は不十分であると批判する。すなわち、ミリコフスキーはここで、ラビ文獻においてはテキスト系統分析という成果が見られるのだから、テキスト祖型の再現が可能であると述べている。しかしその一方で、その根據とされているラビ文獻のテキスト系統分析はまだ僅かしか行われていないことをミリコフスキー自身が認めている、とシェーファーは指摘する。

テキスト祖型のない校訂・佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）説いていた。これに對しミリコフスキーは、資料間の複雑な関係を別の形で説明する試みを示している<sup>17</sup>。それは、Mishnah や Tosefta といった個々の作品が成立する以前、後にそれら作品の素材となる無数の傳承ユニットが口傳で傳わっていたというモデルである。それら素材の發展した形のものが初期の作品に取り込まれたり、素材の初期段階のものが後に成立した作品に取り込まれることもあったであろう。このようなことが、出来上がった作品どうしの関係の判断を難しくしてきた。しかしそれは、それぞれの作品を構成する素材のユニットどうしを見比べて作品そのものの間の関係を判断しようとするところから生じる難點である。それゆえ、そうした視點から作品どうしの関係を説明することが難しいからといって作品の編纂がなかったという結論を導くことはできない。また、シェーファーは作品の境界が曖昧なテキストの代表として Hekhalot にも言及していた。ミリコフスキーは、ラビ文獻に對するシェーファーの評価は多くこの Hekhalot から得たものであろうと推測する。その上で、だがこの作品はラビ文獻の中でも特異な存在であり、その特徴をラビ文獻全體の特徴と一般化することはできないと述べる<sup>18</sup>。

以上のように、シェーファーとミリコフスキーの論争は、ラビ文獻に見られる①寫本間の異讀の大きさ、および②Mishnah と Tosefta 等の作品間の関係の複雑さ、という二つの事実をどのように解釋するかというシェーファーの問題提起から始まった。これまで見てきたことをまとめると、シェーファーの解決法は、ラビ文獻においてはテキストは常に變化し續けており作品と作品の間でも絶えずテキストの移動があった、そしてその結果こうした二つの現象が現れた、という解釋をとることであった。彼は、ある一時期に起こった編纂によって作品が他と區別を持つものとして確立されるという見方を否定し、ほとんどの場合テキスト祖型と呼べるものは存在しなかったと述べていた。一方ミリコフスキーは、①に關して

---

17 Milikowsky 1988: 210-211. Milikowsky 2002: 522-524 においても同様の考え方が示されている。

18 Milikowsky 1988: 202, 207-208. Milikowsky 2010: 84, n. 7 も参照。なお、上述のようにシェーファーは、Bereshit Rabba に引用される Yerushalmi が現存 Yerushalmi と異なることから、兩テキストの獨立性を疑問視していた。ミリコフスキーは 2002 年の論文においてこの件を取り上げ (Milikowsky 2002: 524)、シェーファーとは異なった 2 つの説明法を好意的に紹介している。この 2 説の違いは、現存 Yerushalmi とは異なる Mishnah 注解で Bereshit Rabba に現れるものを、今日の Yerushalmi の異なるヴァージョンと見るか (Albeck 説)、あるいは、Talmud として固まっていなかった Mishnah 注解と見るか (Margulies 説) である。ミリコフスキーは 2 説いずれが正しいか判断するすべはないとしながら、兩説いずれに對しても可能性を持つ説であると理解を示している (Milikowsky 2002: 524, n. 11)。

は、実際に検証したテキストにおいては寫本間に大きな異讀は認められず、小さな異讀は後世の様々な要因によるものであると説明できる、としていた<sup>19</sup>。一方、②については、後に作品を構成する要素となる素材が作品の編纂が起こる前に形を變えつつ存在していたという状況を想定することによって説明することができるとしていた。そしてそうした状況は作品の編纂の有無とは関係がないと指摘している。ミリコフスキーの立場は、寫本の系統分析を行ない可能な限り原本に近い形を再現するべきだというものであった<sup>20</sup>。

一方で、ミリコフスキーは、テキスト祖型が存在しなかった可能性のあるケースにも言及している。すなわち、Babylonian Talmud は學園の中で講義・議論されたものがまとめられていったもの、その初期には口傳で伝えられていたものであるという説に基づいたケースである。その場合には、意圖的な編纂活動（これは確實に存在したとしている）はその要點に關してのみ行なわれ、細かな言い回しまで規定されたのではない可能性がある<sup>21</sup>。それゆえ、この作品に關しては嚴密な意味での一つのテキスト祖型というものは存在しなかった可能性があるとする。

だが、當初口傳であったからテキスト祖型が確立されることはなかったという説明は、ラビ文獻の他の分野の文獻にも適用されうることなのではないかという疑問も起こる。ミリコフスキーは、これは Talmud が學園の中で成立していったという特殊な事情によるものであり、Bereshit Rabba のような Midrash 文獻や後世成立した作品では事情が異なるという説明を添えている<sup>22</sup>。

ミリコフスキーは、こうした特殊な例を除いては、原型に近いテキストの再建を目指すべきであると言う。だがもちろん、テキスト祖型再建を目指しても叶わない場合はある。ミリコフスキーが擧げているのは、現存寫本の状態が非常に悪い場合や、複数の寫本傳承の讀みが一つの寫本に入り系統混交が起こっている場

19 寫本間に讀みの違いが見られる、作品間でテキストの一部の移動が見られる、あるいは、書寫生が改變を加えているという點に關し、ミリコフスキーは、こうしたことはギリシア語やラテン語のテキストでもしばしば見られることであり、ラビ文獻が特に特異であるというわけではない、とも述べている (Milikowsky 1988: 203; 2006: 95)。

20 シェーファーはこれに Hekhalot の場合も加えて説明しているが、先に觸れたように、Hekhalot は特殊な文獻でありその特徴を一般化することはできないとミリコフスキーは批判している。なお、注 18 も参照。

21 Milikowsky 1988: 208-209. Talmud の成立に關しては土岐 1994: 189-192 も参照。

22 Milikowsky 1988: 209-210. ミリコフスキーのこうした説明をシェーファーは次のように批判する。ミリコフスキーは作品を編纂を経て成立するものであると考えているが、自身のそうした原則で説明しきれない状況があると口傳という魔法の杖を持ち出す、また、口傳説を自身に都合のいいケースにのみ適用している (Schäfer 1989: 91)。

テキスト祖型のない校訂・佛教經典とユダヤ教ラビ文獻研究における本文批評、そして「開かれた文獻學」デジタルヒューマニティーズプロジェクト（シルク）合、あるいは、現存する寫本がいずれもオリジナルの讀みを傳えていない場合などである。しかしこれらの狀況は、作品編纂がかつてなかった〔それゆえすなわちテキスト祖型がかつて存在したことはなかった〕ということとは何の關係もないとミリコフスキーは言う<sup>23</sup>。

以上がシェーファーとミリコフスキーの議論の大筋である。この議論を踏まえて、最後に本講演を振り返ろう。シルク氏は大乘經典の歴史的テキスト狀況について次のように語っていた。

佛教文獻において、編纂前のテキスト作成段階と編纂後のテキスト作成段階に明確な斷絶を想像する必要はないということ、いや、むしろ想像すべきではない……インド社會自體から得られるソース、すなわち、サンスクリット寫本や翻譯・引用はすべて、繼續しつつあった、そして極めて流動的な過程の跡が偶然に保存された結果なのです。

これは、ラビ文獻に關しシェーファーが説明していたテキスト狀況に非常に似たイメージである。シルク氏は、大乘經典においてテキスト祖型は存在しなかったと考えている（和譯「大乘經典の性質」の項参照）。だが、ラビ文獻においてテキストは常に流動しており、他と區別される作品というものが確立されたことはないと言明するシェーファーとは異なり、シルク氏は、たとえば『迦葉品』の資料を説明して「『作品』が非常に流動的な狀態でインドに存在していた」と述べている。流動的な形で「作品」は存在していたがテキスト祖型はなかった、という考え方のイメージは圖4に示されている。

では、テキスト提示に關してはどうであろうか。ここにおいてもシルク氏の見解はシェーファーとは少々異なる。シェーファーは作品は確固たるものとして存在することはなかったと考えた。しかし、シェーファーにとってもそれぞれの寫本は現實に存在してきたものである。寫本は各々、その傳承を傳えている。それゆえ、それらは他の寫本のテキストと混ぜてはならない。寫本研究とはすなわち、各々の寫本のテキストをそのままに提示することである、というのがシェーファーの考えであった。一方シルク氏は、各々の寫本等の傳承をそのまま傳える重要性も認識する一方で、部分祖型の再建は可能であろうと考え、それを再建する意義も認めている。そして、シルク氏が進めるプロジェクトでは、個々の寫本と再建された部分的祖型いずれにもアクセスする手段として新たなシステムが開發されているという。このように、シェーファーが個々の寫本のテキスト提示以上の

---

23 Milikowsky 1988: 206.

作業に意義を認めないのに對し、シルク氏は部分的祖型の再建の有用性を認識している。この差は、シェーファーとは異なりシルク氏が流動的ながらも「作品」の存在を認めていることによるものと推測される。

その一方で、シェーファーと同じくシルク氏は、テキストに關し、それは常に變化してきた流動的なものであることを強調している。そして氏は、こうしたテキストの流動性はその始まりから大乘經典のアイデンティティーであったと語っている。テキストは常に流動的に存在していた、そしてそれゆえテキスト祖型はそもそも存在しなかった、というこの考え方は、大乘經典においてどの程度一般化することができる見方なのであろうか。ミリコフスキーによれば、テキストがどのような形で存在してきたのかを見極めるには、寫本等個々の證言資料の分析を続け、データを重ねることが必須であるということであった。シルク氏は、テキスト祖型が存在しないとしても、その再構築を目指す作業に何らかの意味はあるとも本講演で述べている。それゆえ、同氏が率いるプロジェクトにおいては、様々な可能性を視野に留めて資料分析が行われるであろうと推測される。氏が示したテキストのイメージは大乘經典一般に關し言えることであるのか、あるいは何らかの修正が必要となるのか。プロジェクトが進むに連れその方向も見えてくるものと期待される。

最後になるが、ライデン大學地域學研究所博士課程在籍の鈴木伸幸氏には、講演和譯の草稿に目を通していただき貴重なご助言とご協力をいただいた。ここに記して謝意を示したい。

参照文献（講演和譯末尾の参考文献に記載のないもののみ）

Milikowsky, Chaim

- 2010 Peter Schäfer and Chaim Milikowsky, “Current Views on the Editing of the Rabbinic Texts of Late Antiquity: Reflections on a Debate after Twnty Years.” In Martin Goodman and Philip Alexander, eds., *Rabbinic Texts and the History of Late-Roman Palestine* (Oxford: The British Academy, 2010): 79-88.

土岐健治

- 1994 『初期ユダヤ教徒聖書』日本基督教團出版局。

(野武美彌子)

〈キーワード〉 Open Philology project, デジタルヒューマニティーズ, テキスト校訂, 大乘經典, 『迦葉品』